

Title	スワヒリ語マクンドゥチ方言の文法：名詞と動詞を中心とした記述と分析(Abstract_要旨)
Author(s)	古本, 真
Citation	Kyoto University (京都大学)
Issue Date	2018-11-26
URL	https://doi.org/10.14989/doctor.k21408
Right	
Type	Thesis or Dissertation
Textversion	ETD

京都大学	博士（文学）	氏名	古本 真
論文題目	スワヒリ語マクンドゥチ方言の文法：名詞と動詞を中心とした記述と分析		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>本論文は、スワヒリ語マクンドゥチ方言の文法に関する記述的研究である。スワヒリ語には、東アフリカ沿岸部に約20ほどの方言があるとされるが、マクンドゥチ方言もこうした方言の一つで、タンザニア連合共和国、ザンジバル・ウングジャ島、マクンドゥチ郡を中心とした地域で話されている。本論文は、マクンドゥチ方言の文法に関して、十分な研究がなされていない点を中心に、論者自らがフィールドワークによって集めたデータに基づいて記述・分析を行うことを目的としている。本論文は以下に述べる全12章からなる。</p> <p>第1章 マクンドゥチ方言とその話者について</p> <p>マクンドゥチ方言の概要について説明する。具体的には、話される地域、言語系統、言語名、先行研究の概要、データとインフォーマント、類型論的特徴、本論文の目的について述べる。</p> <p>第2章 音韻の概要</p> <p>音韻の概要として音素目録と音節構造の提示と、形態音異音論的変化の説明を行う。マクンドゥチ方言に5つの母音と32の子音が認められる。子音の中には、借用語でのみ観察されるものも含まれる。音節構造は、鼻音が単独で音節を成したり、借用語に子音連続がみられるものの、V, CVの開音節が基本となる。形態音異論的変化としては、まず、1人称単数の主語接頭辞、及び目的語接頭辞、行為者標識のnyiからNへの弱化と、これらの形態素の脱落が挙げられる。また、形態音韻論的変化としては、これ以外に融合母音語幹をもつ動詞の初頭母音と、直前の形態素末の母音との融合が挙げられる。</p> <p>第3章 名詞類の概要</p> <p>名詞類には、名詞、形容詞、代名詞、指示詞、所有詞、疑問詞が含まれる。名詞の特筆すべき特徴として、名詞クラスと呼ばれる名詞分類が挙げられる。13の名詞クラスを設定することができるが、名詞修飾語や、動詞活用形中の人称接頭辞は、一致する名詞の名詞クラスに応じて異なる形で現れる。また、多くの名詞は、接頭辞と語幹に分析することができ、名詞クラスと名詞接頭辞の間には強い相関がみられる。</p> <p>形容詞は、名詞と同じ形の接頭辞でマークされるため、一見ただけでは、名詞との区別が容易ではない。しかし、名詞と異なり、単独で項の位置に現れにくく、形容詞を他の修飾語で修飾することもできない。また、典型的な形容詞は、名詞クラスに応じて形を変えするという特徴をもつが、この点も名詞とは異なる。</p>			

代名詞には、自立的な形式をもったものと、拘束的な形式をもったものがある。前者は、人称に応じた形式を、後者は一部の人称と名詞クラスに応じた形式を持つ。

指示詞は、近称、中称、遠称の三系列からなる。指示詞は、この三つの系列と、照応関係にある名詞の名詞クラスに応じた形式をもつ。どの系列の指示詞にも、2音節からなる基本形があるが、近称と中称には、これに加えて、1音節の縮約形、3音節の重複形もある。所有詞は所有者の人称、及び所有物となる名詞の名詞クラスに応じて異なる形式となる。特に、親族関係を表す名詞を修飾する際、所有詞は弱化した形式で現れる。疑問詞は、名詞を修飾することがないタイプと、修飾することができるタイプに分けることができる。後者のタイプは、名詞クラスに応じて異なる接頭辞でマークされるが、どのような接頭辞でマークされるかは、疑問詞によって異なる。

第4章 動詞類の概要

主語接頭辞でマークされる語形をもつものを動詞類に分類すると、動詞類には、必ず他の動詞類とともに現れるものと、そうではないものが含まれる。後者を動詞、前者を助動詞と呼ぶ。動詞は、語彙的な情報を有しており、多くが、主語や目的語の人称や名詞クラス、TAM（テンス・アスペクト・ムード／モダリティ）に応じて活用する。この活用は、接頭辞の付加か、語幹の交替によって実現される。動詞の中には、TAMに関するいくつかの活用形を欠いたものや、明示的なTAMの標示なしで、TAMを標示する形式をもつものもある。

助動詞は、TAMの標識として機能する。助動詞は、主語の人称や名詞クラスに応じて活用する。中にはTAMに応じて活用するものもある。助動詞は、語彙的な情報を表す別の動詞の活用形の後続を義務的に要求するが、どのような形の活用形が後続するかは助動詞によって異なる。助動詞は、多くが動詞に由来するものである。

第5章 名詞と動詞不定形の音調実現

マクンドゥチ方言のプロソディについて議論する。先行研究では、マクンドゥチ方言が、スワヒリ語他変種と異なり、声調の対立を示すことが示唆されてきた。しかしながら、先行研究で記述されているような声調を、話者たちの発音から確認することはできない。例えば、先行研究の中には、HLという声調をもつとされる名詞があるが、こうした名詞の音節間に明瞭なピッチの違いはみられない。また他の名詞や動詞不定形も、単独で発音された場合、音節間に大きなピッチの違いはなく、平坦な形で音調が実現する。このことは、筆者の聴覚印象に基づく観察だけでなく、音響分析の結果からも見て取れる。スワヒリ語他変種では、ストレスと呼ばれる音声的卓立が、高ピッチを伴って語の次末音節の位置に現れる。マクンドゥチ方言で、単独で発音された語が平坦な音調実現を示すという事実から、マクンドゥチ方言はストレスをもたない言語であるということが示唆される。マクンドゥチ方言がストレスをもたないという主張は、音声的な事実だけでなく、「9/10クラス」の1音節名詞の存在や、動詞活用形中の無意味形態ku-の随意的脱落といった形態的特徴からも支持される。

第6章 末母音の形態素らしさ

バントゥ諸語研究において、動詞語幹末に現れる末母音 (Final Vowel) は、形態素と分析されることが一般的である。マクンドゥチ方言でも、末母音は、動詞が表すアスペクトやムードに応じて交替する。このことから、末母音は一見すると形態素みなす分析は特に問題がないようにも思われる。しかしながら、末母音は、TAM接頭辞とは異なり、交替しない場合や、そもそも現れない場合がある。また、どのような機能を担うかが不明な末母音も存在する。こうしたことを踏まえて、本章では、末母音を形態素とは考えずに、語幹形成を説明することを試みる。具体的には、語基盤モデルを用いて、語幹形成を説明し、PFMの考え方を援用して、語幹交替を説明する。

第7章 テンス・アスペクト・ムード／モダリティ

マクンドゥチ方言の動詞の活用によって表される事態について記述する。まず、マクンドゥチ方言において、動詞活用形がどのような事態を表すかは、TAM接頭辞や語幹の交替といった活用だけでなく、動詞そのものに内在するアスペクトにも左右される。完結と未完結を表す活用形が表す事態に基づいて、動詞のアスペクトは6つに分類することができる。また、マクンドゥチ方言には、過去に起きた事態を表す活用形が二種類あるが、一方は「完了」を、一方は「完結」を表す活用ということできる。このことは、過去を表す時間副詞との共起や、経験を表す用法の有無からわかる。

マクンドゥチ方言が、テンス（時制）を表す活用を欠いているという点も、TAMの標示に関して重要な点となる。いくつかの活用形は、過去や現在を表しているようにもみえるが、これらの活用形が表す事態は必ずしも、過去や現在を基準時とするわけではない。マクンドゥチ方言では、文法化した動詞もTAMの標示に関わる。具体的に確認されている文法化としてまず、「来る」を意味する動詞の時制標識への変化が挙げられる。通言語的に「来る」が時制標識に文法化することはよくみられるが、一般に変化の方向は、未来か過去のどちらかに限られる。マクンドゥチ方言では、この通言語的なパターンとは異なり、「来る」が未来と過去の双方を表す。

他にTAM標識へと文法している動詞として「欲する」と「する」が挙げられる。前者は将然の、後者は習慣の標識として機能する。

本章では、上記に加えて、接続形の用法も説明する。

第8章 コピュラ動詞とコピュラ文

コピュラ動詞については、形式的特徴、用いられる条件、コピュラ文と複合時制構文における特徴が記述すべき点として挙げることができる。

コピュラ動詞は、主語接頭辞やTAM接頭辞でマークされるという点は、他の動詞と変わらないが、他の動詞にはない特殊な屈折パラダイムを有する。

マクンドゥチ方言のコピュラ文には、コピュラ動詞を用いるタイプのものと、コピュラ主語とコピュラ補語を並置させるタイプのものがある。どちらのタイプのコピュラ文が用いられるかは、多くの場合TAMに関する情報の標示の有無と関連付けること

ができるが、コピュラ動詞が完結形に活用した場合の使い分けはTAMの標示で説明することができない。コピュラ動詞完結形の使用の可否は、コピュラ補語の意味的な特性に着目することで説明できる。コピュラ動詞の完結形は、コピュラ補語が、コピュラ主語と同一の指示対象やコピュラ主語の種類を表す場合、用いることができない一方、コピュラ補語に状態副詞や場所を表す表現が現れる場合は義務的に用いられる。また、コピュラ補語が、コピュラ主語の指示対象の属性・性質、あるいは所有者を表す場合、コピュラ動詞の使用は随意的となる。

コピュラ動詞は、コピュラ文だけでなく、複合時制構文でTAMに関する情報を標示するためにも用いられる。複合時制構文におけるコピュラ動詞は、コピュラ文におけるコピュラ動詞と、形態的にも、統語的にも、意味的にも異なる特徴をもつ。

第9章 統語機能と語順

節中に現れる無標の名詞句の統語機能を同定したうえで、マクンドゥチ方言の基本語順がSV0であることを述べる。マクンドゥチ方言の主語は、主語接頭辞と一致する名詞句と定義することができる。目的語は、対応する受動文で主語となるかどうかと、目的語接頭辞と一致するかによって認定されるが、このどちらか一方の統語的特徴しかもたない名詞句も存在する。また、節中には、主語でも目的語でもない名詞句も現れるが、これらは、ある特定の構造に現れ、節中の他の名詞句と特別な意味的關係をもつものと、付加語に分けることができる。

マクンドゥチ方言では、主語、目的語、述語の語順が固定的ではない。しかしながら、主語と目的語の情報構造上のステータスを同じにした場合、語順はSV0となることや、主語と目的語の意味役割を同じにした場合、好まれる語順がSV0であるということから、基本語順はSV0とみなされる。

第10章 関係節

マクンドゥチ方言には、四つの関係節形成法が存在する。このうち二つは、動詞が関係節接頭辞で直接マークされることにより形成され、もう二つは関係節接頭辞でマークされたコピュラ動詞を介することにより形成される。前者二つは、動詞の定形で表し分けられる否定極性やTAM（テンス・アスペクト・ムード／モダリティ）をすべて表すことができるわけではないが、後者二つにこうした制限はない。

一つの関係節形成法は、主語しか関係節化できないが、残り三つは、関係節化できる名詞句の統語機能に大きな制限がない。ただし、マクンドゥチ方言の関係節は必ず、先行詞に対応する空所を含む。

関係節は、関係節を含む節中に先行詞なしで現れることがある。こうした統語的特徴から、関係節は名詞化のようにもみえる。しかしながら、共起しうる接語をみると、関係節は完全に名詞化されているわけではなく、動詞としての特徴も有していることがわかる。

第11章 指示詞縮約形と主題の標示

近称と中称の指示詞の縮約形が、主題標識として機能していることを示す。指示詞縮約形は、基本形の指示詞と異なり、名詞を修飾できない。また縮約形は、述語の後ろに現れて、述語の前の名詞句と一致することがあるが、基本形は、こうした用法をもたない。述語の前の名詞句と一致するという特徴から、この縮約形は、主題標識として機能していることが推測できるが、そのことは、疑問詞に対応する名詞句と縮約形が一致できないこと、事象報告文で縮約形を用いることができないこと、縮約形が *kila* 「あらゆる」で修飾された名詞と一致できないことから確かめられる。

指示詞縮約形構文は、+Addressationという指定がなされているという点で、左方移動構文や倒置構文と異なると考えられる。

第12章 結論

結論として、各章のまとめをしたうえで、それぞれの章の意義と課題について述べる。

最後には、5, 7, 8章の議論を補足する語彙と例文、民話テキスト、及び参考文献表が添えられている。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、タンザニア共和国ザンジバル、ウングジャ島マクンドゥチ郡で話されているスワヒリ語の方言に関する研究である。スワヒリ語はアフリカで話されているバンツー系の言語のなかでは、共通語の役割を果し最も良く知られている言語である。バンツー系の諸言語の調査はスワヒリ語を媒介として行われる関係で、スワヒリ語それ自体、とりわけその成立の基盤になったスワヒリ語諸方言の研究は、日本だけでなく世界的に見ても稀少であり貴重である。学部時代にスワヒリ語を学んだ論者は、スワヒリ語の方言研究が等閑視されている状況を知り、大学院に進学して以降現在にいたるまで一貫してこれらの方言を研究してきている。この間毎年数ヶ月間フィールド調査を行い、のべでは二年ほどになるであろう。この調査の成果をまとめたものが本論文である。

論者の研究の特筆すべき特徴は、マクンドゥチ方言に関する最も詳細かつ精確な文法記述を提出していることと、そこに見られる種々の言語現象を、標準スワヒリ語やバンツー諸語研究で確立した文法記述の枠組みにとらわれず、一般言語学的な知見を踏まえて記述し分析していることである。とりわけ文法化や言語類型論の最新の知見を援用した分析は斬新である。本論文は全12章と四つの付録から成り立っている。1章は導入で、マクンドゥチ方言についての全般的な説明である。続いて音素論(2章)、名詞類の形態論(3章)、動詞類の形態論(4、6、7、8章)、プロソディー(5章)、統語論(9、10、11章)、結論(12章)となっている。各部分は当該の文法項目に関わる詳細な記述と、先行研究の問題点及び一般言語学的に興味深い言語現象を検討する部分から成り立っている。例えばオーソドックスな音素分析を扱う2章とは別に立てた5章ではプロソディーが扱われるが、先行研究で存在するとされてきた声調が論者の調査によれば観察されず、全般に平板に発音されるとする。そのうえで論者の観察が正しいことを、付録1に挙げられた多くの語彙を音響分析ソフトを使って分析しそのことを証明してみせた。

3章は名詞、形容詞、代名詞、指示詞などの名詞類を扱う。バンツー系の言語は、名詞に付加される接頭辞の種類に従って十数個のクラスに分類されることが有名である。マクンドゥチ方言の名詞クラスを詳述した後、名詞類に属する他の品詞について記述する。そして接頭辞に基づいて名詞クラスを認定する伝統的な方式を放棄し、名詞と一致する語の形態素の形式を基準にすることによって、従来第11クラスとされてきた類は、一致の点で第3クラスと振る舞いが同じで、それと合流する変化があったことを指摘する。伝統的文法記述の呪縛から解放された論者の研究の成果として高く評価できる。

4、6、7、8章は動詞の活用と派生を扱う。4章では規則動詞、不規則動詞、動詞連続、などの順に詳細に記述する。6章では動詞活用の基盤となる3種類の語

幹がレキシコンの中に登録される手続きとして、語根に各語幹を特徴づける語末母音を付加するという伝統的な記述の不備を指摘した上でParadigm Function Morphologyの理論を援用する斬新な試みを行った。必ずしもすっきりした記述にならない点は惜しまれるが、バンツー系の言語に膠着的ではない形態論も存在することに注意を喚起している点は評価できる。7章はテンスとアスペクト及び文法化の問題を扱う最長の章である。特筆すべき成果としては、まず動詞とテンス・アスペクトマーカとの組み合わせにより実現する意味によって、動詞固有のアスペクトを6種類に分類することができたことがあげられる。また現在文法化しつつある動詞の記述も極めて興味深い。なかでも、動詞 -chaka「欲する」は未来を表す接辞-cha-に文法化した一方で、動詞として存続した-chakaは新たに文法化し始め、将然のマーカとして文法化しつつあることを指摘している点は、文法化のサイクルと呼ばれる現象のひな形として今後参照されるだろう。8章はコピュラ動詞について論じる。「AはBである」を意味するコピュラ文に、コピュラを使う場合と使わない場合があることを発見し、一般言語学的知見を援用してその使い分けを明らかにする。付録2、3として7章と8章の説明を補足する例文を掲げる。なお付録4は採集された民話と文法分析である。

9章では、統語的な振る舞いをもとに主語や目的語といった統語機能を定義した上で、SV0が基本語順であることを示した。また譲渡不可能名詞とその所有者のような典型から外れる目的語の詳細な記述を行うが、これは先行研究では取り上げられることがなかった現象である。10章では関係節について、4種類あるその形式と機能、先行詞に関する接近可能性の階層などを多角的に分析した。なかでも関係節内の項が節の外側に現れることがあると言う珍しい現象を発見した意義は大きい。11章では指示詞の縮約形が主題表示の機能を担うことを指摘した。さらに同じ主題化でも倒置構文などと異なり、主題に関して聞き手の知識を増やす機能（Addressation）に特化していることも明らかにしたが、これらは全て論者の新発見であった。

ただ本論文に問題点や望むべき点が残されていることも確かである。例えば言語学の素養の無いインフォーマントに、論者が作例した文の文法性を尋ねることを多用することなどはその一つである。論者に都合の良い判断を引き出している可能性は排除できないし、それを読者が検証する術もない。索引や語彙表がないことも文法書としての利便性を低下させている。ただ全体が電子媒体で公表されれば、利用者は語彙や用語を容易に検索することができるだろう。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。2018年9月7日、調査委員4名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。